



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



續二十四孝繪抄全

貝原先生遺稿
浦川公左画圖

續二十四孝繪抄

書林

嵩山房
宋榮堂 合梓

叙

此後二十四孝傳を故貝原先生の

伝より世に傳へしを又二十四孝子なる

かみ又廿四名撰て出し且て存字

女文字もくすつらに傳へるやう

しゝく児女を養ふ道小學くると

宗とてし^{ちよ}所^めなる^る是^{これ}彼^{かの}先生^{せんせい}の^{せい}傳^{でん}也^{なり}
篤^{とく}實^{じつ}より^{より}出^いずる^るま^また^たふ^ふ然^さハ^ハ者^{もの}難^{がた}き
い^いそ^そん^んか^かる^る形^{かたち}然^{しか}る^るを^を予^よ師^し森^{もり}川^{がわ}
先生^{せんせい}に^にま^まに^に信^{しん}ず^る索^{さく}得^{とく}て^てあ^あり^りき^きく
校^{こう}訂^{てい}を^をか^かへ^へそ^そ中^{ちゆう}傳^{でん}の^の所^{ところ}出^いれ^る也^{なり}鬼^き
を^を注^{ちゆう}せ^せし^しれ^るこ^こう^うそ^その^の傳^{でん}を^を信^{しん}ず^る

し^して^て先^{せん}生^{せい}の^の忠^{ちゆう}誠^{じやう}あ^ある^るふ^ふた^た祖^そせ^せる^る
信^{しん}ず^るこ^こう^うそ^その^の傳^{でん}を^を信^{しん}ず^る予^よハ^ハ何^{なん}れ^れ功^{こう}も^もあ^あり^り
愚^ぐ者^{しや}な^なま^まに^にと^と唯^{ただ}け^け出^いの^の世^よに^に
け^けい^いに^に信^{しん}ず^るあ^あり^りき^きく^すそ^その^の傳^{でん}を^を信^{しん}ず^る
な^なれ^れう^うと^と思^{おも}ふ^ふを^をい^いく^くそ^その^の傳^{でん}を^を信^{しん}ず^る
乞^こひ^ひある^るま^まに^に信^{しん}ず^るそ^その^の傳^{でん}を^を信^{しん}ず^る

了^{その}事^{こと}は由^{よし}字^じ通^とる^る中^{ちゆう}々^々
愚^{おろ}る^ろあざ^あふ^ふや^やけ^けし^しお^お

森川保之門人

玉水亭保海

誌

孝

始^{はじめ}於^お事^{こと}親^{おや}

中^{ちゆう}於^お事^{こと}君^{きみ}

終^{はつ}於^お立^た身^み



續二十四孝子姓名

仲由 毛義 顧慊 吳隱之 許攸 陳遺 丘傑 李迥秀

杜孝 曹娥 李密 盛彥 范喬 阮緒 解謙 賈會

鮑永 王脩 李瞻 李嗣 殷仲湛 孫法宗 狄仁傑 緹榮



仲由
為親
負米

續二十四孝子傳

○第一 仲由

仲由字ハ子路孔子十哲の一人なりて至孝な
曾子と並び称せらるる元來貧窮なりて常
は麤食を食ひ擔夫とありて米を負ひ遠
き所へまで其賃錢ゆく親を奉じし千辛万
苦して孝行を竭せしが親死して後時來り運
ひもく立身し出づ時ハ車も無あり從者數多

卒へ家ハ米を積貯へ暖ふ衣袍を食ひ何
不足あらざるなりなりども心ふを樂しと
せばやもう辛苦しとも親とせふことあり時を
慕ひたりとぞ孔子を拜仰小賞多しとぞ。
本文孔子家語より

○第二 杜孝

杜孝ハ巴郡といふ處の人なり善く母事へて
孝行の名あり母常小贈をぬえり杜孝役小

依^よて成都^{せいと}へ
 引^ひく魚^うを
 買^かひ竹^{たけ}の筒^{つつ}に
 入^いれ草^{くさ}を以^も
 ち筒^{つつ}の口^{くち}を
 塞^ふぎ川^{かわ}へ流^{なが}
 して曰^いく願^{ねが}
 うと此^{この}魚^う



を母^{はは}の食^くへ給^{たま}ふんを祝^{いわ}ふ故^{ゆゑ}に
 又^{また}留守^{くしゅ}せる杜^と孝^{こう}は妻^{さい}江^{かう}の水^{みづ}を汲^{くみ}て竹^{たけ}の筒^{つつ}に
 流^{なが}すを以^もちて上^{うへ}に見^みせし中^{なか}に魚^う二^{ふた}尾^びあり
 妻^{さい}也^{なり}やう是^{これ}に曰^いく夫^その母^{はは}なるものなり
 とし給^{たま}ふ贈^{たま}ふる姑^こふをせり是^{これ}
 即^{すなは}ち孝^{こう}感^{かん}のいふことなりと聞^き人^{ひと}悉^{しつ}く感^{かん}
 あり○本文後漢書

第三
 鮑永

鮑永
去叱犬
妻



鮑永字八君
長上黨屯留
の人なり後母
小事へて孝心
を尽せりある
時永が妻姑の
前よりいつく
狗を叱りしれ

バ永（その）の（不）禮（い）を怒り即ち妻を離別して再び
娶らざりけるの（の）後漢書

○第四 毛義

毛義字（の）八少節廬江（の）人なり家貧
孝行の名あり爰小南陽に張奉と
いふ賢人毛義をよめり來りて對面せ
しと又思ひくはく毛義を守令とい役小
たるとの召文來りては毛義其文を推して

した捧げりちく笑片向つ作念あり張奉を
 をとく其あやうひの俗なるを賤しあかる人
 ともあやで友かせんとそとまぐ尋ひ来り
 我廉忽を自恨て早く辞して立去り
 後小毛義母を喪ひし時官を去る服を召ひ
 公府より数辟どもあつて禮を重なり後
 又公より車をりて徴まつるも至るべ此時
 張奉始めくも義が潔白あるを知り往日守令

張奉
 訪毛義



又なるを喜びハ親の爲めありけるをあて
 賤しめ辱んぜハ我眼にともるざう一たりと
 いひく深く悔みくも時帝も大に感
 一許多に禄を賜ふをり酒肴を給りて
 其の安危を問せしむる孝初の徳ありて

○後漢書

○第五 曹娥

曹娥を令誓上虞の人なりその父巫を業と

度尚
 爲曹娥
 立碑



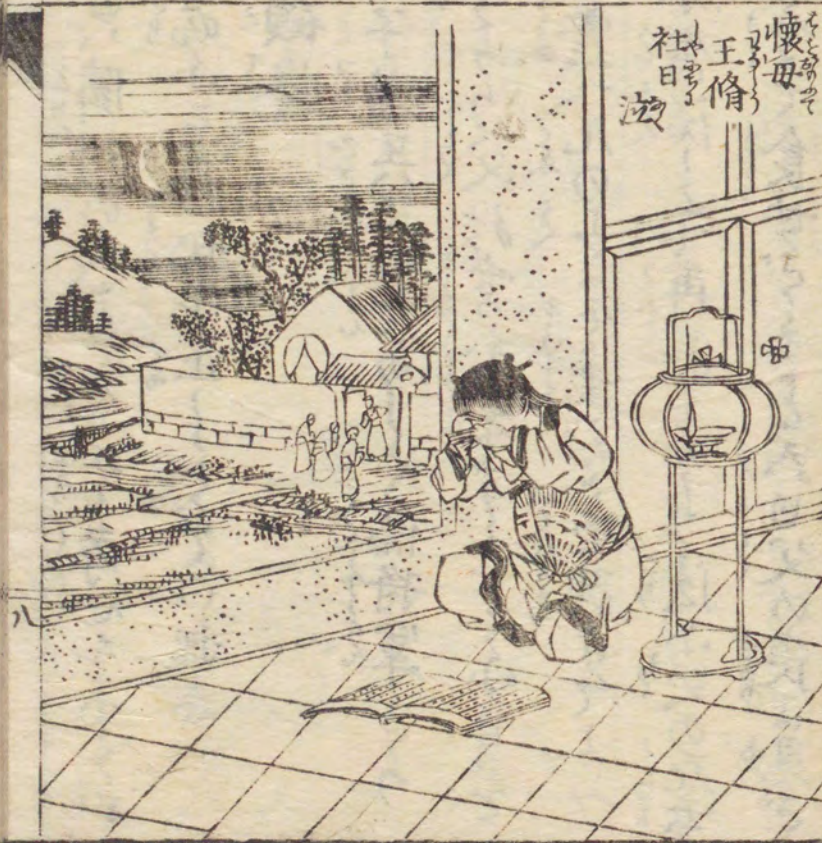
せーが漢安二年八月日水神を迎へんとて
 水に溺れし死しうて曹娥年十父の死を

知ざるやあふ江に治る泣悲しむる十七日遂に
 水中に身を投ぐ死す後元喜元年小縣長度
 尚といふ人そけ孝心の切あつてを憐れ石碑を
 立てて曹娥を江南に道傍に改め葬りてり
 後漢書

○第六 王脩

王脩字叔治北海營陵の人なり年七歳でて
 社日と母を喪ひたり然る小此社日ハ例年郷

人集アてく
 神を祭る
 其の年
 の社日也
 此祀をなし
 王脩感
 念と懐く
 哀むる甚



一ウリケ事ニ隣村の人々までも其孝心をあわれ
こま脩が為ふそけ祀を止しとぞ○魏志

○第七 顧慄

顧將字ハ子通呉王の長子とて偏將軍となり
これバ放つて父を尋ねて来すといふ身を
浄衣を整へ几の上へ坐し書を垂読するといふ
一句も小應諾して再ねたり後父の死去
せしめを食せざることを日父の喪に見る

るよりて常小棺の象を刻し書きて下り小井中を
安坐すおけり泣き泣き終る妻中卒アとる○呉書

顧慄 畫 棺 哭 亡 父



○第八 李密

李密字玄邃令伯犍為武陽の人なり父は早く
 死す母は他人に嫁しこれより依り祖母に
 養はれ成人し孝行類ひし祖母年老て病
 小病々々泣涕し日夜帯を解ぎ食をそ
 め菜を與ふ自ら先嘗みし看病ふ
 一入孝を盡し春秋天氏傳を治り博く書
 を覽く通じ人々を感ぜり華陽國志



李密
 祖母
 事

○第九 卞耽卞野

卞耽卞野ハ卞壺字ハ望之ガ二子なり蘇峻と

いものの兵を起して清溪といふ所を攻めしむ
 下壺諸軍とたふ拒ぎ戦ひしが賊火を放ち
 て焼討しけりふより味方大に敗れしなり
 下壺ハ背に創ありけり愈々して刀
 戦しき遂に討死しけり下珍下肝父の討死
 をりより共哀歎けり切に入回付いふに
 よく討死し後小翟湯といふ人こそをすて嘆
 して曰父ハ君に死し子ハ父に死す忠孝の道
 一門に萃るるを賞しけり○晋書

下珍
 下肝
 死於
 忠孝



○第十 吳隱之

吳隱之字八處。默濮陽鄆城の人なり。博く文
史に渉り。弱冠より清操。人なり。年
十餘の時。父ふと。年。日夜悲し。泣く。門外
を通る人も。涙を流し。其後母を喪ひ。時
哀し。ふ。身。疲。衰。より。爰。隱之。隣家
に。韓康伯といふ人あり。母ハ。賢き夫人
也。隱之。哭。を。聞。ふ。食。を。輟。り。箸。を。投
て。悲し。歎

感之
隣母



きつ。康伯
小對ひ汝君
官。小居を
此の如き人
を。推。考。を
べ。といふ
も。後。小

康伯吏部尚書といふ官なりく隠之を薦て
清級の階ふ上せしとぞ其後小廣列の刺史と
し竟小光禄大夫といふ位なりとぞ

○晋書

○第十一

盛彦

盛彦字ハ翁子度陵といふ所の人なり母疾
固く固くとなす故小仕に及びて躬自看病
然る母久しく疾ゆりて氣短くなりとぞ

婢を推擽きくふぞ婢心より怒り恨み盛彦が
暫く化へずを伺ひ瘡癰を取来り灸す母
小与へたり母是を食く不味といひ美しといふども
心より怪しき食残せしを密に藏り至成る
が降るを待て見せたまふ盛彦大に驚き母を
抱き泣入氣絶ししううが又蘇り耐不思
儀や今までんぞうう母の兩眼豁然と開き
元の如く小明くなりたりとぞ是盛彦が孝感の致

とくろ
まて処なりと人々称一たり○晋書

盛彦

之母

食蟬

蟪蛄



○第十一 李嗣

李嗣字八宣伯平祖を敏といふ敏舟小字海
浮とて波やうがそゆ方をかゝるは是れ由る李嗣
その本像を作やその事と生くる人小事
が如く故小孝行の名高くやえ々々後仕へる司
徒といふ官小至る○晋書

○第十三 許孜

許孜字々季義東陽馬亭といふ所の人なり

李嗣事木像



二親を喪ひし時歟一と歎きて身体衰へ杖をつ
 うねを立ちて独りて妻を棄て独り親の墓所
 へ宿し松栢を救町へ極列移り一日一足の麻
 糸りくかの極る松を折しバ許孜悲歎しそ
 るひより我を念ひてと嘆きさるる日猛獸
 来りくその麻を殺しお折る松の本根下へ
 歪り許孜ををくく大の檻に其麻を埋めて
 為し家をゆるし猛獸おと出来り許孜が前より
 自ら牙を撲く死より許孜をく歎息し又
 是をも埋るるくくで○晋書

許攸
悲
死鹿



○第十品 范喬

范喬字伯孫年二十の時祖死より其終の時

范喬首をなぐ我汝が成人をなぐとて死す

とてかつ恨なりといひて紀念の碑を興へて

范喬み才小なり一時范喬が祖母云くなりとて

其時のありさぬを傳へてせむとバ范喬悲しむ

堪む紀念の碑を執くさあくと泣き涙を流し

くるといふ○晋書

○第十品 殷仲港

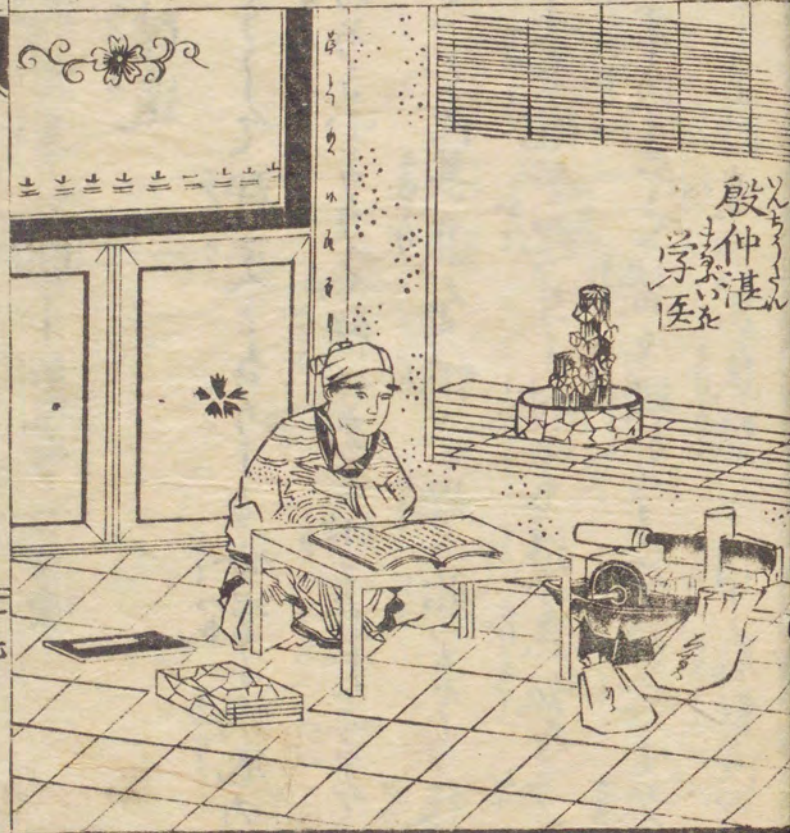
殷仲港ハ陳郡の人なり父病年を積て愈々

仲添る夜
看病して
帯を解け
父の病を
治さんとして
醫術を學
び終ふ其時
妙なき人



范喬觀
遺硯悲泣

藥を合は
しく小涙を流
しんふとぞ
遂小一眇と
なりたる後
父をあれ
泣くをれ
るをん



殷仲港
學醫

人^{ひと}と^も其^{その}至^{いた}孝^{こう}を感^{かん}ずあ^あへ^へと^と○晋書

○第十六 陳遺^{ちんい}

陳遺^{ちんい}ハ少^{せう}う^うと^と郡吏^{ぐんり}とあり^{あり}が母^{はは}常^{じょう}小鍋底^{こくわて}の
焦飯^{こはん}を好^{この}むふ^ふあり^{あり}と^と役小^{やくせう}ある^{ある}時^{とき}も囊^{ふくろ}を^を帶^{おび}て
飯^いを炊^いく^くと^と其^{その}焦^こを納^{いれ}く母^{はは}小貽^{せうい}と^と後^{のち}
孫恩^{そんいん}と^との者^{もの}亂^{らん}を起^{おこ}せ^せ時^{とき}も孫^{そん}焦飯^{こはん}を多^{おほく}
く^くお^おが軍敗^{ぐんぱい}と^と皆^{みな}々^々逃^{にが}か^かと^と餓死^{がし}する^{する}と^と
影^{かげ}と^とも陳遺^{ちんい}ハ^ハの焦飯^{こはん}を持^もち^ちお^お歸^{かへ}て

陳遺^{ちんい}孝^{こう}
関母^{かんぼ}耳目^{じもく}



命を助るなり然る不其母ハ家小居て陳遺が
役よりく乱る舎々の存亡の知るざるを歎死
悲しく終小目盲耳を聞えぬなりと陳遺ハ
涕のづれ家より歸りて母をね其耳目のふ
ひるをそく泣きけびくまバ母の耳目忽ち
元のごとくふなりと云○南史

○第十七阮孝緒

阮孝緒字ハ士宗陳留尉氏の人少く幼より

至孝あり母王氏病小臥々々耐合菓ハ生人參
を用ひてハ治るがごとく然るども世少き薬
あり古より鐘山といふ山のふもとありを傳へ
りりその依る孝緒に独かの山へ赴き險難を
登り函若小入る目を穿ちて求むても得ば
いふハせんとてい躊躇ふも不忽然として
一足の廉出まり孝緒ハせんて歩むはさや
はるが導くがめ孝緒ハ感づてその

阮孝緒
隨鹿
得藥



後小隨ひてひふとある処わく麻ハ消るが如く
失ふより四下を視まば果して人々あり孝
緒是を得て急ぎ帰る母子与へてまじり病忽
愈しり是をうたふ天より孝緒に賜ふ
物なりんとひてぐ徳にりりるの南史

○第十八 孫法宗

孫法宗一名宗之ともいふ呉興といふ所の人也
其父ハ孫恩といふ者小隨ひて海を渡りて終ふ

害をうけし其死骸をいづれ是れ小依く母も兄も
 並びに餓死しつゝ此時法宗八年幼稚してや
 小流浪し十六ふりて故郷より千辛万苦
 して棺槨を造り墓をいづる母と兄とを葬
 りたり然るも父の死骸のなきをうけ世間
 の人はいふハ已に血を以て死骸小灌がかりし
 親の骨あり其血をみ他人の骨なきは
 血流もく深きとす乃刀を携へて海に浮く



孫法宗 濺血

見遺骨

骸骨をらんとて肉を切り血を灌ぎて再び求
る事九十年たり是れ依り臂胫の皮全き
有る血脈も竭きといふに求め得
ざる終ふ身終るまで喪服を著く常小墓
より宿りて後ハ鳥獣も馴近づき恐
る事なく若麻など獵夫の網よりハ解放
ち獵夫ハ價をやりて麻ハ命を助けり
然るに頭瘡出ず甚苦み

一夜一人の女法宗に對ひていふや我ハ天の使
なり創といふのハ善人ハ出来ぬのなり
牛糞を著く傳へる強あべといふ法宗大
喜びその教めなりと喜ば忽ち瘡より
身終るまで妻を娶らば人小物をり
諸侯より召かんといひ来ても行
卒下りり○南史

○第十九丘傑

丘 傑 夢 母 療 蝦 毒 墓



丘傑字ハ偉時呉鳥程の人なり年ナ字の
 時母を喪ひり味いひあを食ふ禮小悲を
 りて孝く菜を食ふ只生の菜め食カク小
 一夜の夢不亡母出来りて丘傑は對ひ汝生の
 菜を食ふ蝦蟆毒小中まり我冥牀の前
 小丸菜ありこまを服さべーといひくさあ
 くり丘傑大小起ぬくんまばあ
 一の甌りりく菜を入り急ぎ是を服し

忽ち科斗子を夥しく下しけるぞ○南史

○第二 解叔謙

解叔謙ハ母疾小妙々々耐空中ニありて丁
公藤を以て酒小仰りて之を用ひバ病愈べと
いふを夢くいふ求んとく山深く入る一人の
老翁木を伐り居り叔謙がや近付をんて
曰此ハ是丁公藤あり風を療むる方驗ありと
云つて方解を叔謙小与へ且酒小浸す法を教へ

々々叔謙大ニ驚び去るに降る法のみく
して母子とへ々々バ疾果々々癒るる○南史

解叔謙遇仙



○第廿一 狄仁傑

狄仁傑字ハ懷英唐の世に人なり親ハ河陽
といふ處に住リ仁傑泰宗に登リ白雲の孤
飛をみるに左右の人を顧みて曰吾親の家を
かの雲に下ふあまうとくや久しく瞻め
悵々雲移て後山を下アタリ○唐書

○第廿二 李迥秀

李迥秀字ハ茂之母ハ少き時身死しうたむる

狄仁傑
望白雲



ふ小迥秀妻
常小媵婢
を罵るこ
甚一母その
罵るあうを
ゆてふ樂
しうぶそふ
依る迥秀

其妻を離別し、或人其故を問ふに答へて曰く夫婦を娶るハ姑ふよく事へさせんが為なり、少くも姑の氣ふいぬ事あるハ家ニ置ぐ故に離別せしなりといひ、されバ其人大小孝心を錢ト云ふ。○唐書

○第廿三 賈會

賈會ハ唐の代ハ人あつて志高く天子より辟多しと云ふ疾といひ、年々なり親を喪

李迥秀去妻



ひし時土を夏く墳を作りおづろ松栢をう
 名く其墳のたりの廬を結びく佐々もとど時
 の人其孝行を称く関中の曾子也と云あへり。唐書

賈會

擔土

作親墳



○第廿四 縵縵

縵縵ハ齊の國は太倉の令淳于公の女して兄
 弟四人あり父罪ある都へ討ちたり時五人の
 女を足て曰く子を生まるも男を産まばか
 時の用不立と罵りけるを縵縵みて悲し
 やるるを其ま父は随ひて都へ至り願
 するをよりくやけるハ妾が父使とかりしより
 齊の臣中皆その私を称しけりぬ然る

緹縈赴都
救父



今法に坐せしむる刑に死する者ハ
再生せしむる過を改めて向後を悟るんハ
せんか
願ふハ妾を婢やも使ひたり
父が罪を贖ひ宥めたり前の過を改させんと
ぞ書りたる天子其書を獻覽しあひて其
孝心を憐れむやと父の刑罪を除く
たり

續二十四孝子傳終

備前草加定環輯

二十四孝繪抄

浪華浦川公左画

明表了凡著

浪華南里亭主人譯

陰隱文繪抄

東武葛飾戴斗画

尾張小山駿亭編撰

繪本今川狀

同 沼田月齋画

御家流頭書繪抄

懷宝童子往來

全

二冊

二冊

全

此書ハ甚難の年譜をひくふ小抄也
信濃守の御家繪を入るてありし
無双の御家繪を全の若かりし御家
御家繪をひくふ御家繪をひくふ御家
とちかひてありし御家繪をひくふ御家

此書ハ甚難の年譜をひくふ小抄也
信濃守の御家繪を入るてありし
無双の御家繪を全の若かりし御家
御家繪をひくふ御家繪をひくふ御家
とちかひてありし御家繪をひくふ御家

此書ハ甚難の年譜をひくふ小抄也
信濃守の御家繪を入るてありし
無双の御家繪を全の若かりし御家
御家繪をひくふ御家繪をひくふ御家
とちかひてありし御家繪をひくふ御家

此書ハ甚難の年譜をひくふ小抄也
信濃守の御家繪を入るてありし
無双の御家繪を全の若かりし御家
御家繪をひくふ御家繪をひくふ御家
とちかひてありし御家繪をひくふ御家

文寶書狀鏡

江戸溝口先生筆

全一冊

法人のありやうをいふはふ素をりこ
多事得る多事いふはふ素をりこ

年姪狀の集書はあふ近世季の文素は
商人の集書はあふ近世季の文素は
集書はあふ近世季の文素は
あふ近世季の文素は
あふ近世季の文素は

大阪書林

心齋橋通博愛町南へ入

河内屋勘助

